

12年・春の沢集中  
足尾山塊・庚申山

## 庚申川本流(境沢)

メンバー:白土(L)、志満、三井(記録)  
遡行日 12年6月9日~10日

深夜、前泊地の「銅親水公園」手前の駐車場に車を停める。既に「シナノマタ沢」Pと「仁田元沢」Pも幕を張っていた。嫌な雨がシトシト降っていて氣勢が上がらず、早々にテントにもぐる。

### [第一日目]

ロクに寝られぬまま目覚め。雨の降り方次第では入渓を見合わせる事態もあり得たが、今日はそこまで酷い雨になる事はなさそうだ。とは言うものの雨中の遡行になる事は必定、モチベーションの上がらぬ雰囲気を漂わせたままそれぞれの目的の沢に向って駐車場を後にする。

我々は舟石峠を越え、銀山平のカジカ荘の先の林道ゲート前に車を留めるとザックを背に林道を辿る。

本来なら直ぐに庚申川に入渓するのだが、早々にゴルジュ帯となって泳ぎがあるようで、雨の降る、気温も低い、こんな日にいきなり全身ずぶ濡れ状態は流石にご辞退申し上げたい。そのまま林道を進む。

適当な下降点が見つからないまま進んで結局、笹みき橋から本流に下降する。本流は水量の少ない河原状でそれが続いている。

釜のある小滝がポツポツとあり、巨岩の間の小さな隙間を潜り抜けたりと、

多少の変化はあるのだが概ね単調な河原歩きが続き、小雨の中、ただ黙々と歩く。

森閑とした沢の中、瀬音と雨音、それにハーネスに着けられた登攀具のガチャガチャという音がやけに響き、何か不可思議な雰囲気に関われる。

単調な河原歩きに飽きあきしてくると沢はゴルジュ状になってくる。

ゴルジュといっても水量は多くはないし、両岸もそれ程高くはないので威圧感はない。釜のある小滝は暑い時期なら濡れを気にせず取り付けるだろうが今日はそうは行かない。小雨とはいえ、昨日から降り続けている雨のせいで増水はしているのでへつりと巻きで通過していく。

左岸に「三才沢」を迎える。(この沢名なのだが足尾の精通者、岡田氏の著書では「三才沢」、登山大系では「ミオ沢」となっている。字をみると気づくだろうがどちらかの読み違いだと思われるのだが…。)

ここを過ぎれば今日のテン場の予定地の二俣までもう少しだ。(早くテン場について落ち着きたいね。)

しかしその先のゴルジュの釜は落ち込みの滝も白く泡立っていてとても近づけない。左岸のリッジ状に取り付き20mの懸垂で沢床に戻る。(今回ロープを使用した唯一のところ)

更にゴルジュは続くかやがて先が開け漸く二俣にでる。

二俣は遠目には草の台地状に見えたのだが到着してみると熊笹が密生していて、それに意外にでこぼこしていてイマイチの所だった。

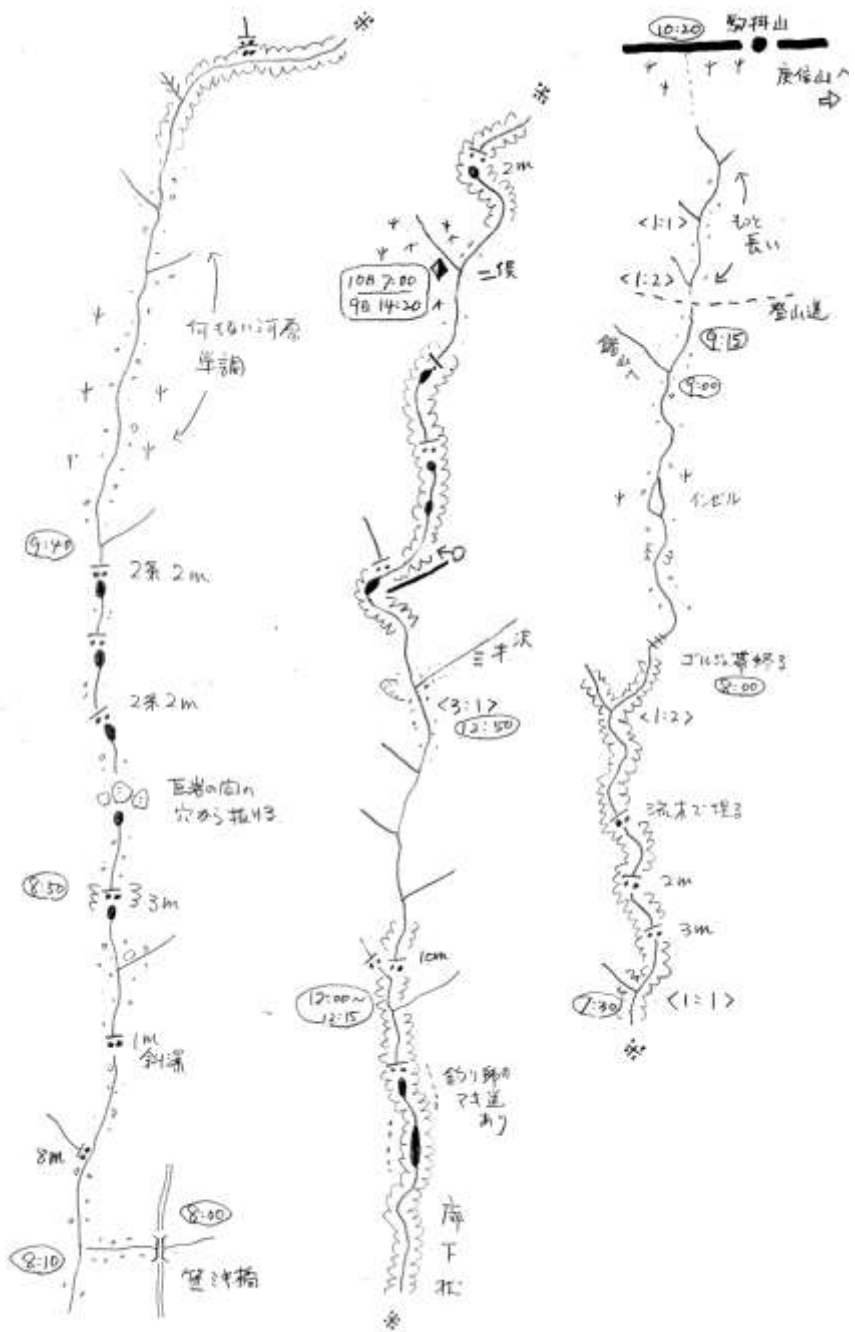
とりあえずザックをおろし、適地を探

すが何とか一張り分の平坦地を見つけツエルトを張る。  
焚き火をしようとするのだがここで思いがけぬ天恵。釣師が捨てたものか、或いは次に来る時のために置いていったものかは分からないがブルーシートがあったのだ。これを拝借しない手はない。張ってみると6畳ほどもある大きなもので格好の雨除けとなった。白土君が焚き火奉行となって粘りをみせ、安定した炎になったし、ブルーシートは快適空間を作ってくれて悪条件の中、快適なテン場になった。  
焚き火はいいものだ。話のネタが尽き、炎を眺めているだけで至福の時間が流れていく。

## [二日目]

雨の中、思いのほか快適な一夜を過ごして朝を迎えたが、雨は上がっていた。薄っすら青空もみえていて今日はよさそうだったのだが…。  
沢は直ぐにゴルジュ状になるが別に厄介なところは無く快適に進む。  
1時間ほどでそのゴルジュ帯もきれ、ゴロ歩きとなって源頭に近づく。  
二俣となり丁度交信時間となったが高度も上がっていてどこかのパーティーと交信できると思ったのだが何処とも交信出来なかった。(このあと定時交信はきちんとおこなったのだが今回はこのパーティー共交信できなかった。)この二俣の左俣は鋸山に向かうもので、ここは庚申山に近い右俣に入る。直ぐに登山道が横切っている。六林班峠から庚申山荘に至る長いトラバース道だが廃道化してきているらしい。先を急ぐ。沢はますます細いものとな

り枝沢を何本か分けると水も涸れ、殆ど藪漕ぎもなく稜線の登山道にでた。沢の装備を外し、スニーカーに履き替えて登山道を辿る。  
コブのような小ピークを三つほど越えなければならぬので意外と手間取り集中地の庚申山に到着。  
樹林の中のコブのように少し盛り上がったピークで昔、縦走で登った事があったがもっと展望のいいピークだったような気がしたが。  
頂上には「仁元沢」Pが震えながら待っていた。このあと直に「シナノキ沢」Pも到着し、あとは日帰りの「笹ミキ沢」Pの到着を待つだけだが小雨もパラついて寒い。連絡をとりたいが何故か無線交信が出来ない。(どうも強力な電波がでていて妨害されているらしい。)何か問題がおきたとも思えないのだが気がかかる。  
待つこと暫し、「集中」時刻を少し過ぎた頃、庚申山荘からの登山道を平本君と熊崎君が息咳切って登ってきた。  
「笹ミキ沢」Pは庚申山荘で待っていると。それでは、という事で我々も庚申山荘に下山する。  
1時間ほど下ると笹ミキ沢Pの待つ庚申山荘に到着。これで無事全パーティーが顔を揃え集中完遂となる。  
記念撮影をしたあと全員で銀山平に下山、カジカ荘で入浴して山行の汗を流してさっぱりしたところでそれぞれ厚木への帰途につく。



12年6月9日~10日  
 春川沢集水 尾尾/度信川本流

